

男女共同参画シリーズ その2

土木地質の技術者として

As a geological engineer

1 私のキャリアパス

私は大学で地質学を専攻し、現在の会社ですと土木地質の技術者として働いてきた。気がつけば25年以上経過してしまったが、管理職となっても楽しい現場から離れられずにいる。技術士資格は、社内での強い勧めもあり業務遂行上も必要であったことから30代の頃に取得したが、とにかく幅広い内容を必死に思い出しながら受けた記憶がある。合格できたのは、当時「色々な所に行けて現場は面白いだろう？」といいながら地質に関わる幅広い経験値を与えてくれた上司のおかげである。

ここ数年で女性技術者として経験を重ねたことが注目されるようになり入社当時と比べると「何事だ？」と思うこともあるが、年相応に責任を課せられてきて、体が動かなくなるまでは技術者人生を全うできるとよいなあと自分自身は考えているところである。

入社当時、地質のような現場主体の分野では女性はこちらかというと邪魔で扱いにくい存在だったと思う。しかし一方では私の前にも少数ではあるが業界内に女性技術者の諸先輩方が活躍しておられ、このことは、自分も居ても良いんだという心の支えになっていた。

このように色々なことを都合良く解釈して脳天気過ぎていた中で、とある設計技術者の方から「仕事は真剣勝負なんだから女性と一緒に仕事できない」といわれた時にはかなりショックだった（今思うと確かに当時の私は甘ったれていた）。しかし、それが反骨精神になり、嫌がらせのように(?)くっついて仕事をさせて頂いて、その方がいつの頃からか仕事の話聞いてくれるようになった時には本当に嬉しかったことを記憶している。もう亡くなられてしまったが、仕事に非常に厳しい方で、女性を差別しないからこそその

本音だったのだと思う。今でも本当に感謝している。

2 私のワーク・ライフ・バランス

私は一人暮らしをしているため、かなり仕事に時間を割けていると思うが、その反面で誰にも頼れず、最低限の日常生活を送るための時間の捻出は必須になってくる。寝る時間を削ぐくらい忙しくなると、本当に生活が荒んでしまう。それが終わった後は糸の切れたタコみたいに腑抜けてしまうが、このメリハリが結構好きだったりする。

仕事が行き詰まってくると、美術館や街中を歩き回るなど、心の赴くままに行動している。

世の中には、色々簡単で便利で安価なモノがあふれているが、やはり人の手が真摯に作り上げたものや、作り手のプライドを感じさせるものに触れると、心が洗われるようで、自分の仕事のアカも落ちていく（と良いなあと思っている）。



写真1 ダム基礎岩盤の掘削現場

3 土木地質の技術者として

これまでの技術者歴30年弱の中で、仕事に没頭する自分と、時々「女性だから適当にやれば良いし、無理せずに休んでも良いし・・・」といった悪魔のような周囲の甘言に都合良く乗ってしまう自分がいた。

しかし、その中で仕事の厳しさを叩き込もうと

して、非常に厳しく叱責・指導してくれた上司や同僚、発注者や関係機関の方々がいた。今考えれば、そのくらいの厳しい言葉を浴びせないと私の根性は矯正できなかったのだろうと、反省とともに感謝している。

今の私はその方々に、世の中の土木構造物の安全性がどう構築されていて、国民の生活を守るために技術者は何を優先すべきか、また、そのために許された時間とコストがどの程度かなどのバランスを考えて業務に向かい合う世界の入口付近に連れてきて頂いたと感じている（まだまだ未熟でおこがましいが）。

土木の世界に限らず、リスクを誤認すれば大変な事故に繋がってしまう。土木構造物の基礎である地盤・岩盤の解釈には地質技術者が責任を持つとともに、設計技術者にも理解してもらわなければならない。これがどれほど厳しい仕事で、誤った判断が何を引き起こすか、私は今でも時々怖いと思うことがある。掘り下げれば下げるほど地質リスクは出現してくる。それに、何といっても一番怖いのは、周囲の工期短縮やコスト縮減の声に流されて安全性を見失ってしまうかもしれない自分そのもののリスクだ。

見失っていることに気付かなければ結構幸せだと思う。当然、過剰な調査や過剰な安全性は必要ないし、地質リスクが気付かれずに残っていたとしても設計や施工でリスクカバーできて、運良く安全が保たれているのかもしれない。しかし、掘り下げて考える訓練をしておかないと、いつか“リスクに気付かない”という技術者として致命的なミスをおかすことに繋がる。

「（無知の知に気付かないまま）地質の浅い解釈で構造物建設の流れに乗って進むだけ」では、技術者としての進歩はないと思っている。

4 これからの技術者の皆様とともに

日本の安全神話は（悲しいことに薄れてしまった感はあるが）、大先輩の方々の偉大な努力の上に築かれてきたものである。しかし、当時の最高技術でも時代を経れば当然古くなるし、新しい経験値も蓄積されるので、それに基づいて改善せざるを得ない。

その過渡期にいる今の時代に、こういった真剣さを解ってもらおうと、本当に技術者として育てようとするれば、女性だろうが男性だろうが言葉もきつくなる時があるかもしれない。

その辺を若い方達に理解し引き継いでいってもらうために、普段のコミュニケーションを大事にすることの重要性を感じている。

私が入社した頃は、珍獣であるかのように物珍しく見られた女性技術者だが、今の若い女性技術者は、これから本当に真価を問われる厳しい立場に立たされていくのだと思う。いろいろなところで技術者のネットワークも形成されているので、大いに利用して、めげずに頑張っていってほしいと本当に願う。

私も、これからの時代を担う若い方達が、個人の立場や状況に応じた役割を誠実に確実に自分のペースで処理しつつ技術力も磨いていけるような働き方の枠組みを、一緒に考えていける立場でありたいと思っている。



写真2 女性技術者代表の打合せ（社内）

【男女共同参画推進委員会より】

土木に携わる女性技術者の先駆けとして歩んでこられた三谷さん。現在、良き指導者として技術者の育成に余念がありません。ますますのご活躍を。

三谷 由加里（みたに ゆかり）
技術士（応用理学部門）

（株）建設技術研究所 九州支社
地圏環境室
e-mail : mitani@ctie.co.jp

